

防衛力整備計画では、これらに関するお買い物リストが示されることになろう。

3本柱の三つ目は、防衛基盤。それには9項目中の「8防衛生産・技術基盤」が入っている。ここにも経済安保重視が見られる。

「防衛基盤」には、もう一項目「9人的基盤」も挙げられている。これの目玉は、退職自衛隊員・家族支援庁（仮称）の設置。退職自衛官の再就職支援を前面に出しているが、戦傷者や遺家族などへの軍事援護体制の構築につながりかねない。再就職支援も、不法滞在者の摘発を担う入国警備官の「即戦力」として退職自衛官に応募を呼びかけるといった動きを見れば、治安の軍事化を誘う危険性がある。『子ども版防衛白書』の配布などと重ねれば、退役将校の失業対策として学校での軍事教練指導要員が送り込まれた歴史も思い起こされる。

経済のみならず、治安、そして社会の軍事化も促し、財政危機を招く安保三文書改定に反対しよう。

（いけだ・いつのり／戦争に協力しない！させない！練馬アクション）

特集2 山の手空襲を語りつぐ朗読と音楽の集い

語りかけ得るあなたへ （パウル・ツエラン）

——体験証言の沈黙——

佐藤 いづ子

野坂昭如の『戦争童話集』は、どの話も、「昭和二十年、八月十五日」で始まる短編〈童話〉だが、織り込まれたアジア・太平洋戦争の事実に洩れはない。正確で緻密な調べを基に、生起する一切を包むかなしみの塊が、幾つも幾つも転がるこの作品が、自分に大事と分かったのは、六〇歳を過ぎてからだ。初出は、一九七一年「婦人公論」連載と知り、学生集会での野坂の講演が思い出された。「左翼に肩入れすれば、結腸癌になつて死ななきゃならん。右に寄れば腹切つて死ななきゃならん。ボカア、どっちもやだね。」高校の頃から、高橋和巳を読んできた私はムツとしたが、早口の訥弁に聞き入った。主題の記憶はない。その後も、野坂の忠実な読者ではなかったが、改めて『火垂るの墓』を精読した時、冒頭場面は、作家の果たし得ぬ願いの成就と知った気がした。

「ぼくは、かえりみて、三度、逃げすぎている。……逃げすぎたことのうしろめたさが、骨にからんでいる。……無惨な死にざまを果たした、養家の両親や、焼跡の少年達の鎮魂歌を書くつもりはなく、書けもしないが、その死にかかずらわって、ただ逃げてばかりいた、今、生き長らえる自分の、うしろめたい気持ちに、責めたてられ……ぼくはぼく自身の小さい文字を書く。」

「戦争反対の目的も、死んでしまった肉親や生活に対する鎮魂のつもりもない。ぼくはしかし、書かなければならないと思っているし、いささか自負の言葉のべるならば、ぼく以外のだれに、ぼくが構築する世界が書けるかと、考えている。」「あの恐ろしさは経験しないとわからない。私は経験をえらそうにいうつもりはない。わかってもらえないむなしさも知っている。しかしあえていう、戦争で一番ひどい目にあうのは子供たちだということを」。

「ぼくは、かえりみて、三度、逃げすぎ

『戦中日記』を読む』に、このような文

語り声が記録になるとき

『表参道が燃えた日——山の手大空襲の体験記「増補版」』
の重版に寄せて

山本 唯人

言を追っていると、「ボカア、やだね」が浮上する。高橋や三島のように、自分にかまけて死ぬわけにはいかない、とあの時野坂は、戦後ベビーブーム世代の若者に投げ掛けたのではなかったか。君らの自己否定はどこをむいているか……とも。〈自分にかまける〉ことに変わりはないが、「骨にからんではいる」自分自身を生きて「鳥のようにくりかえし……言わずにはいられない」と。

世界中に残る膨大な戦争体験の証言は、そこに〈無言〉を沈めて立っている、と思う。「あの日、十三、四歳以上だった日本人それぞれの胸のうち、ひとまとめに『記念』するなど土台無理。」と、言葉をつくし費してなお澱むものがあると、野坂はこうも〈証言〉する。「栄養失調の妹のかたわらで、かぶりついた夏のトマトの味は、決して苦くも辛くもなかった。あんなうまいトマトを、以後食べたことはないのです。」これら〈無言〉の継承を、体験記は求めている。

(さとう・いつこ) 山の手空襲を語りつく集い実行委員会

7月12日、港区青南小学校の体育館で「山の手空襲」八一周年追悼朗読と音楽の集いが開催された。1945年5月25日夜から、米軍によって東京西部一行われた「山の手空襲」の体験を次世代に伝えることなどを目的として、2016年より続く集まりである。コロナ流行による中断を挟み、今年で7回目になる。主催は山の手空襲を語りつく集い実行委員会、昨年から港区との共催になった。

この実行委員会の運営協力団体の一つとして、「表参道が燃えた日」編集委員会がある。2008年2月、『表参道が燃えた日——山の手大空襲の体験記』を刊行するにあたって、設立された本の編集グループである。編集委員会は、同年4月に同書の「2版」2009年8月に「増補版」を刊行した。さらに、2011年6月に『続表参道が燃えた日——山の手大空襲の体験記』を刊行し、今年の「集い」を機に、品切れになっていた1冊目の「増補版」の重版に踏み切った。

「集い」は第1回より体験記の朗読を軸

にしているが、それらは、『表参道が燃えた日』正(増補版)・続のどちらかより選ばれる。体験者とそれを受け継ぐ世代が参加する朗読と、聞く者たちの「声の響き合い」が「集い」の主役だとすれば、2冊の本は、

